

『サーカスギャロップ』

著：崎谷はるひ

ill：今 市子

「美久は、もっと遊びたかったのかな」

ぽつりとつぶやくと、阿東が「日下さん……」と顔をしかめた。日下はかまわず、ずっとためこんだままだった本音を打ち明ける。

「いろいろ、つまらなかったのかもしれない。ほんとに、取り柄ってまじめなことくらいで、面白い人間でもないし、阿東さんみたいにかっこいいわけでもないし、顔もふつうだし」

だからしかたないのかも。そう言うと、阿東は怒った顔をした。

「なに言ってんだよ。いいひとで、料理だってうまくて、いい会社にはいって、まじめで。日下さんは、きちんとしてるよ。そういうところは、男としてかっこいいことだろ。それに、顔だって、いい顔だよ」

「はは。ありがとう」

「慰めじゃないよ。そりゃ、男臭いイケメンとは言えないけど、なんていうか、かわいい系だと思うし」

あまりに阿東が一生懸命で、日下はちいさく噴きだしてしまった。

「あはは！ か、かわいい系って。それ褒め言葉になってないですよ」

「いや、まじめに褒めてただけど……」

「いいですって、もう。はは、あはははっ」

笑いはだんだん大きくなり、肩を震わせてくすくすと笑っていると、なぜだか肩にまわった阿東の腕が強くなった。じっと見つめてくる彼は、無言になる。

いま言ったのはあくまで、過去の後悔にすぎない。こうだから美久に選ばれなかったのか、こうであれば裏切られなかったのかと、鬱々とした日々の残骸だ。

それを真正面から受けとめ、慰めてくれようとする阿東の言葉はありがたく、そしてひどくすぐったかった。

「無理に褒めなくてもいいです。でも、ありがとう」

笑いすぎて、目尻に涙が浮かんでいた。それを自分で拭うより早く、阿東の長い指がそっと拭い取る。

（え……）

驚いて目をしばたかせた日下が阿東を見あげ、そして固まった。彼はひどく真剣な顔で、まばたきもぐっと減った目で日下を見つめている。

なにか、これは、雰囲気が違う。色事にはまったく慣れていない日下でも読み取れる、ある種の濃い空気がある場に漂い、にわかに近すぎる距離を意識してしまった。

「あの、阿東さん。どうかしましたか」

そわそわと視線を逸らすと、自分の薄い肩にまわった長い腕が視界にはいった。よくある友人同士のスキンシップかと思っていたけれど、この状況は、まるで——肩を抱かれているかのようだ。

というか事実、日下は阿東に肩を抱かれている。親密な距離で、親密な力加減で、

やさしくそっと身体を捕まえられている。

なんだこれは、と思いながら、日下は静かに恐慌状態に陥った。

(待って、待って。ちょっと待って)

誰かにそう言いたい。でも誰に言えばいいのかわからない。まったく表情に出ないままパニックになっていると、耳元でささやくような声がした。

「……ほんとに、かわいいと思ってんだけど」

どろりと溶けるような低音に、日下はかすれた声で「え？」と返した——つもりだった。

じっさいには、ひゅっという、声にもならない音が唇から漏れただけだ。

「ごめん、好きなんだよな。あんたみたいなタイプ」

至近距離で見あげる阿東は、やはりきれいな顔をしていた。その顔がどんどん近づいてきて、あれ、と思ったときには目のまえがぼやけていた。

(え……?)

唇に、なにかやわらかいものが触れている。現状把握ができないまま、日下が固まっていると、阿東の低い声がした。

「やべ、かわいい。まじで」

はあ、と熱っぽい息が頬に触れた。そしてまた唇がふさがれ、やわらかな弾力とかすかなぬめりを感じる。触れた場所からじわっと、他人の熱が伝わってくる。

そうまでされてようやく、日下は自分がキスをされていることに気づいた。

(あれ? なに? などで?)

肩を掴んでいた手は、いつの間にか日下の身体を抱きしめている。ぎゅっと力強く縛められて、逃げ場がどこにもない。

うなじに手がかかった。大きな手に後頭部を包まれ、何度もついばんでくる唇はやわらかい。吸われ、こすりつけられ、薄い皮膚が濡れて肉がたわむ。

ちゅ、と音を立てて、阿東の唇が離れた。

「なんで、抵抗しねえの」

「……なんで、って」

問われてもよくわからない。やさしく触れてくる唇が現実のものとは思えない。ただ真っ白になったまま、繰り返されるキスは十回を超えた。

(なんで? などで)

噛むように動かされ、驚いて唇を開いてしまうと、隙間にそっと舌を這わされた。痺れのようなものが走り、とっさに目をつぶってしまうと、遠慮がちにすべっていたなめらかなものがもうすこし奥まで忍んでくる。

ちろちろと動くそれが、茫然とする日下の舌のさきをかすめた。自分でもびっくりするくらい過敏に反応し、びくっと全身が震える。

(なんで、なんで、なんで)

舌のさきがこんなに感じるなんて知らなかった。ちよんとつつかれ、たしかめるように絡められると「んん」とあまえた声が出る。とたんに深く唇が噛みあわされ、唾液ごとすすするようなキスに襲われた。

「んっ、んんん、ん！」

なにをされたのか、よくわからなかった。ただとにかく、口のなかも頭のなかも、阿東の舌がぐちゃぐちゃにして、身体のなかも心も、ひっかきまわされた気がした。

息があがって、眩暈がする。なにがなんだかわからないのに、阿東はもって理解不

能なことをあの声でささやいてくる。

「……日下さん、キス、慣れてない？ すっげえ、反応かわいいんだけど」

「うあ……」

唾液に光る唇で問われ、かっとなら顔が熱くなった。答えるより早く、震えた唇がまたつ
いばまれ、爪先まで痺れが走る。

どうしていいのかわからず、無意味に両手を開閉した。そもそも日下の人生において、キスを『される』という行為ははじめてだ。そしてキスで感じたことも、はじめてだった。

「なんかそういう反応されると、俺、調子に乗っちゃいそうなんだけど、だめかな」

「だ、だめ？ な、なにが」

自分がどんな反応を見せたのかなど、まったくわからない。うなじを包んでいた手が
背中をさすり、腰にまわる。両腕で抱きしめられてもまだ、日下は身じろぐことすらでき
なかった。

(なにが、どうなってんの。なにこれ)

嫌悪感はない。けれど状況が理解できない。やわらかくこすりつけられてくる唇の弾
力と、手慣れた感じにただ、息が苦しくてたまらなくなる。突っぱねることも拒むことも
思いつかず唾液をすすられ、口腔の粘膜まで舐められる。

本文 p177～182 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>